

遍歴する牧者

金森通倫

本井 康博

(同志社社史資料室)

●新島襄の後継者

「熊本バンド」から同志社総長が数人生まれている。なかでも新島襄に次いで



若き日の金森通倫（新島家旧蔵）

最初に社長（総長）になるべき人材は金森通倫であった。
彼は約四十人の「熊本バンド」中、最初に熊本から入京した。一八七六年七月のことで、半年後（二月三日）に新島襄が自宅に西京第二公会（のちに同志社教会）を設立した際、彼は新島から洗礼（洗礼名はパウロ）を受けた。教会記録の上では筆頭会員である。そればかりか新島の最初の授洗、すなわち新島牧師が生んだ信徒第一号なのである。そして三年後、「熊本バンド」の一員として同志社を最初に卒業したのも金森である。

卒業後、岡山に赴任し、組合教会の開拓伝道に従事した。アメリカン・ボードの宣教師らの協力を得て、ただちに岡山教会を発足させ、まもなく組合教会中、最大の教会に発展させることに成功した。「熊本バンド」が同志社を卒業したのち、同志社で主流を占めるのは岡山県出身の入学者であるが、それもひとつには金森の功績である。

その働きを買われて、彼は同期生の横井時雄に続いて母校に教師として呼び返された。岡山教会牧師の後任には安部磯雄を招いた。金森は神学教育に専念する

との決意を抱いての同志社赴任であったが、多忙で病弱な新島校長の姿を間近で見ると、新島に代わって同志社の要

職をしないで兼務せざるをえなくなつた。彼は次々に同志社教会牧師（一八八七年四月）、同志社社長代理（一八八八年九月）、同志社校長代理（一八八八年九月六月）に抜擢され、

新島の後継者としての地位を確かなものとした。

したがって一八九〇年に新島が大磯で死去するや、衆目は「後任は金森」で一致した。が、ワンポイント・リリーフの山本覚馬臨時社長を経て、同期の小崎弘道が社長に就任した。金森は同志社教員と同志社教会牧師を辞職し、東京に転じて伝道を始めた。いったい何があつたのか。

●同志社を追われる

この悲劇的な幕切れに因して欠かせないのは、新島が残した遺言中の次の一条である。

「金森通倫氏を以て余の後任となす差支ナシ、氏は事務

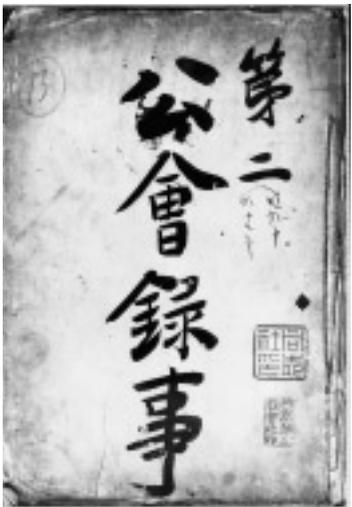
二幹練し才鋒当ル可ラサルノ勢アリ然れとも其の教育家としての人を順育し之を誘掖するの徳二欠け或は小刀細工二陥ルの弊ナシトセス」（『新島襄全集』四、四〇三頁）。

新島が金森の性格、しかも人格に係わる事柄に言及した言辞を臨終の床で残したことが、金森の心証を悪くした。それにしても新島は率直すぎた。そのため「徳二欠け」という問題の箇所を、「新島先生らしからぬ表現」と考えて公表を憚つたり、あるいは「法二欠け」との表現に換えるという処置が同志社内であつたとられたことがある。

問題は、一度は後継者に金森を指名した新島の「変心」である。かつての期待がしだいに萎んだのか。例えば大学設立募金運動での対応。最晩年、金森は「一刀流」、との不満を新島は徳富蘇峰にこっそり漏らしている（同前四、一七九頁）。ちなみに遺言を新島の臨終の床で書き取つたこの蘇峰は、「金森先生に気の毒なことを新島先生はなぜあんなに露骨に書かれたのか」との問に対して次のように答える。



西京第二公会（同志社教会）日誌の表紙と冒頭ページ。金森は新島が洗礼を授けた最初の信徒である。



「金森君が『新島』先生の病中に於ける態度は、頗る先生に苦痛を感ぜしめたと思ふ。実は金森君は先生の仕事を代理として居ったわけであるが、金森君自身にあつては、代理を喜ばなかつた。自ら『同志社』社長とか何とかいふものでなければ承知が出来ない様な調子であつた」(徳富蘇峰『新島襄先生』三二二頁)。

●金森校長への不信任

真偽のほどは不明である。しかし、私見では少なくとも主たる理由が別にふたつある。ひとつは後継校長としての教育理念や教育法に疑念を感じ始めたこと。いまひとつは後継牧師としての金森に問題性を嗅ぎ取り始めていたこと。

まず、金森の教育理念に関してであるが、新島は死の前月(一八八九年一月三〇日)に蘇峰に宛てて、自分がこれまでとってきた教育方針、すなわち「気骨のある人物を生かし、殺さぬ方針」に金森が「暗々裏裏二反対之よし」と伝えている(『新島襄全集』四、三〇四頁)。

金森への不信任を新島は同志社の学生

という文言がここに再現する。そればかりか、これが一週間後の遺言に、金森は「小刀細工ニ陥ルノ弊ナシトセス」という形でそっくり入ることになる。

●金森牧師への不信任

新島が金森に感じた不安は、以上の教育面だけに止まらない。いまひとつ、同志社教会牧師としての金森に関して、問題性を払拭しきれなかつたのではないか。

晩年の新島の最大関心事は大学設立運動と並んで組合教会の原則、「自治教会」主義を死守することにあつた。彼は数々の批判を被りながらも一致教会との教会合同にあえて慎重な姿勢、ないしは批判的な態度を固守した。とりわけ膝下の同志社教会は自ら初代牧師を務めた教会であるだけに、また全国の組合諸教会の中ではいわば「総本山」格であつただけに、合同運動の反対拠点であるべきであつた。事実、学生信徒の大半が反対派にまわつたために、同志社教会は「合同反対のチャンピオン」と見られた(『同志社五十年史』一五八頁)。

たちからの情報でさらに追認する。とりわけ五年生の横田安止やすだからの書簡の内容は決定的である。一八九〇年一月七日(新島の遺言が認められる二週間前)に横田が新島に送つた書簡には、校内に金森批判の雰囲気醸し出されている、との注目すべき一節が含まれる。

「生徒一般の反動ハ金森氏ニ在ルカ如シ、金森氏ニ対スル生徒間の感情甚々悪シ」とか、「当今の学校の管理ニ不平ヲ鳴ラシ新任校長ニ反動致シ居リ候」というのである(同前九下、一二四二頁)。

横田自身は金森にむしろ同調的で「新任校長」との関係も良好である。にもかかわらず、その彼にして金森の教育法がとかく「小刀細工の様子」を脱却できない恨みを感じずにはおれなかつた(同前九下、一二四三頁)。

新島はこの書簡に対して大磯から同月一六日に返書を横田に送つた。その中で新島は、「何分学校方同志社ニ限ラス何レにも小刀細工之起り候は大ニ困却仕候、殊ニ我校ニ小刀細工カ当時現在ニ之通弊ならん」ことを慨嘆した(同前四、三四五頁)。横田が使つた「小刀細工」

かくして新島は広津友信や横田安止ら学生会員に働きかけて「同志社教会規則」をあらたに制定し、「自治教会」主義を明確に成文化しようとした。

ところが牧師である金森の態度は違つた。彼はこの規則の原稿を手元においたまま、なかなか印刷に付して会員に配布しようとはしなかつた。このことも横田は新島に(先の)書簡で報じている(『新島襄全集』九下、一二四〇頁)。

そもそも教会合同に関しては「熊本バンド」は概して賛成派である。金森も例外ではない。それどころか柏木義円に言わせれば「熱烈なる合同論者」であつた。一八八七年の組合教会総会では同期の小崎弘道、横井時雄、宮川経輝や宣教師のD・C・グリーンとともに合同草案の作成委員に選出されている(本井康博『京都のキリスト教』一七二頁、一八一頁)。

ただし、金森は同志社(学園・教会)に身を置き、しかも新島の最有力後継者という特殊な立場に立つだけに、表立って新島を批判することはなかつた。したがつて一八八八年の組合教会総会でも、ふたりの同志社教会員(学生の古賀鶴次

《略歴》かなもり・みちとも(1857.10.2~1945.3.4)

「熊本バンド」のひとり。肥後(玉名郡小天村)に生まれ、熊本洋学校でL・L・ジェーンズからキリスト教の指導を受ける。同校の廃校後、ジェーンズの勧めで同志社英学校に入学。在学中、「ライオン」の異名を取る。入学まもなく新島から西京第二公会(現同志社教会)で徳富猪一郎(蘇峰)らと受洗する。同志社余科(神学科)一期生として卒業後、岡山で伝道に従事。一八八六年九月、同志社教員に就任し、以後、新島の右腕として教育、教会、大学設立運動で活躍するが、新島の遺言を契機に同志社に対する態度が冷却。ついに新島の死の半年後、同志社を去り、東京に転出。まもなく組合教会からも脱退し、牧師を廃業。その後、各界を遍歴するが、いずれも大成せずに終わった。晩年、信仰を回復し、同志社の校内伝道でも大きな成果をあげた。郡山市で死去。夫人(旧姓・西山小寿)は岡山出身で神戸女学院第一期生。岡山・山陽英和女学校の創立者のひとり。長男(太郎)は山形県、徳島県知事を務める。

郎と花島健起)が、「雷電ノ如ク鉄棒ヲ」
「縦横ニ降り廻ス」ように暴れまわつて
反対姿勢を表わしたので対して、推進派
の金森は(松山高吉や横井時雄などと
もに)終始、頑なまでに沈黙を守つた
(同前、一八一頁)。

この総会に関して、さらに注目すべき
ことを同志社教員で宣教師のD・W・ラ
ーネットは伝える。「この運動の運命を
決した総会に同志社教会は日本人教授で
もある牧師『金森』ではなく、ふたりの学
生を送り込んだ」と(同前、一八一頁)。
ここに教会内部での金森の位置がよく表
れている。

●同志社を去る

教会合同運動は新島が死去した三カ月
後に開催された組合教会総会で正式に中
止が決議されて収束した。まもなく金森
は同志社を去り、東京・番町教会に転
じる。そればかりか、ほどなく組合教会
そのものからも去る。棄教、いや牧師廃
業である。『回顧録』で「擾乱の子」と
自任する金森の本領発揮である。

棄教の直接の契機はいわゆる「新神学」（高等批評）である。しかし、底流には新島の後任問題をめぐる一連の動きがあった。金森は回顧する。一八九〇年の初頭、後任人事問題を通してキリスト教界が「猜疑と嫉妬」に充滿していることを実感した、「宗教界を脱出したのは、この時から既にその萌はあった」と。

新島の永眠から番町教会に移るまでのしばらくの間、金森は新神学の研究に没頭した。その成果は翌年、『日本現今之基督教並ニ将来之基督教』の刊行となつて現れた。これが組合教会から「異端」と指弾され、番町教会から放逐されたために、金森については組合教会脱退を決意する。一八九二年の総会は「満場一致で私の退会を許した」と金森は述懐する（以上、『京都のキリスト教』二七〇〜二七一頁）。

金森は宗教界を見限った。以後、実業界や政界、さらには官界を遍歴する。すなわち自由党入党して『自由新聞』主筆となつたあと、三井鉱山、武相鉄道、東京米穀取引所を次々と渡り歩く。ついで北海道庁嘱託となつて勤儉貯蓄奨励運

動に従事、次に大蔵省嘱託として貯蓄奨励遊説に取り組む。最後は内務省嘱託となつて「貯金のすすめ」を説いて廻つた。

一九一二年、夫人の死去を契機に信仰を回復させ、キリスト教界（ただし救世軍）に復帰した。一九一四年、同志社の後輩、山室軍平率いる日本救世軍に入隊し、全国伝道を試みた。しかし三年後、救世軍を脱退し、諸教会連合全国伝道を開始した。

一九二七年に今度は東洋宣教会日本ホーリネス教会に入会し、百万救霊を唱えていわゆる「金森伝道」を開始した。しかし、これも一九三二年には脱会する。こうした遍歴のすえ、翌年には第一線から引退し、湘南の嶺山に隠居して洞窟生活を送つた。周囲からは、「今仙人」と呼ばれた（杉井六郎「金森通倫」、「日本キリスト教歴史大事典」）。

● 牧師としての働き

ところで同志社と絶縁以後の金森について付言すると、新島から貰つた書簡が手元に「山の様のように」あつたが、留

守番が「反古だと思つて皆焼き捨ててしまった」と自身、後年に『回顧録』で述懐する。

一方、現存する新島書簡が少ないという「不自然さ」に関して、杉井六郎氏は金森通倫の長男（金森太郎氏）の談話として、「父はある日、新島先生の手紙を火中にした」ばかりか、「再び校門をふむまい」と漏らしていた、という直話を披露される（『新島襄全集』九下、解題一三二九頁）。それに対して私が最近、金森の孫の一人から聞いた限りでは、「自分で焼却したのではなく、火災で消した」のだという。いずれにしろ、複数の説が並列する所に、金森と同志社（新島）との屈折した関係が垣間見えるようである。

金森は最晩年にいたつて、同志社との関係を修復する機会に恵まれた。一九二三年一月に同志社から招かれ、一週間にわたつて「校内大伝道」に取り組んだのである。同志社を追われるように去つてから三十三年が経過していた。はたしてどのような感慨を抱いたのか。

同月二十一日の新島襄永眠記念礼拝に



最後の同志社訪問（デントン邸での歓迎記念写真、1941年5月23日）
中列、左から金森太郎、M.F.デントン、佐伯理一郎、金森通倫、堀貞一、牧野虎次、松尾音次郎。
前列左、中瀬古六郎。

は新島八重を始め四百六十一人が出席した。その時の金森の説教内容は不詳である。しかし、金森伝道の効果は絶大であった。大勢の入信者が生まれ、二月四日には百六十五人に授洗した（『同志社教会一九〇一〜一九四五』二〇二〜二〇三頁）。

金森と同志社との「復縁」を取り持ったのはやはりキリスト教であった。同志社は牧師としての金森に期待をかけたのである。ちなみに金森が信徒（会員）第一号である同志社教会は昨年（二〇〇一年）一二月に創立百二十五周年を迎え、四冊目の教会双書（教会史）を刊行した。歴代牧師のうち、金森が授洗した信徒は堀貞一（千三百五十八人）、茂義太郎（七百五十人）に次いで多く、通算五百二十四人にもぼる（坂本武人編『同志社教会歴史名簿』あとがき）。この数は在任期間（堀十四年、茂二十三年、金森は三年）を考慮すれば、驚くべき数字である。金森の同志社時代は岡山教会時代同様に輝いている。挫折に終わった教員生活に対して、牧師としての貢献は抜群である。